

(表 - 3) 2000年12月の望遠鏡流星の出現数変化
 Table 3 Telescopic Meteors Observational data in December, 2000

寺迫氏の観測では、捉えた流星の大半は、10等以下の暗い流星が占めています。この10等以下の暗い流星はビデオ観測でも捉えにくいので、こうした望遠鏡や双眼鏡を使った観測はとても貴重です。暗い流星がどこまで存在するかという問題は、まだ誰も明確な回答を示していないのです。

(表 - 3) を見ますと、31日の寺迫氏と中村氏が、ほぼ同じ時間帯に観測をしています。その結果は相反した結果となっています。観測方向が違いますから一概に言えませんが、これは観測者の癖なのかも知れません。

2001年1月の観測速報

幹事が観測した四分儀群の観測結果を紹介します。

Date	Begin	Ends	Time	Dir.	aM	Q	Leo	Mag	CI	Meth.
Jun.	(UT)									
03/04	01:00	02:00	60	229.0	+51.0	6	5	-	10.0	0 T(P)
03/04	02:00	03:00	60	229.0	+51.0	3	2	1	10.5	0 T(P)
03/04	03:00	04:00	60	229.0	+51.0	0	0	-	10.5	0 T(P)

T(P) : 双眼鏡観測 (5cm7倍7.3°) 赤道儀で自動追尾

観測者 : 殿村 泰弘 (TONOMURA Yasuhiro)

観測地 : 静岡県小山町

緯 度 : +35°20'39"

経 度 : -138°55'31"

海 抜 : 516 m

幹事はこの時期晴れる確率の低い仙台近郊を諦め、富士山麓で観測することにしました。今年の場合この選択は正解で、仙台での大雪のニュースを横目に四分儀群の観測をすることが出来ました。

また12月24日から27日までアラスカフェアバンクスまでオーロラ観測に出かけました。四分儀群の輻射点が周極星になり、眼視観測では、HR2程度の出現をコンスタントに捉えました。双眼鏡を持っていけばオーロラの観測だけでなく、四分儀群の双眼鏡観測も出来たと後悔しました。もっともオーロラが出現すれば流星観測どころじゃありませんが・・・。

さて出現状況ですが、観測開始の日本時間の1時台が最大で、2時台以降は出現が減少傾向になりましたので、1時台以前に微光流星の極大があったことは明らかです。